

桜島の火山活動状況

(1) 令和4年の概況

桜島では、南岳山頂火口で6月まで噴火活動は概ね低調な状態で経過したが、7月中旬以降は活発となった。

大きな噴石が4合目（南岳山頂火口から1,300～1,700m）を超えて飛散する爆発が5回発生した。また、噴煙が火口縁上3,000mを超える噴火が3回発生した。7月24日20時05分に発生した爆発では、監視カメラによると、弾道を描いて飛散する大きな噴石が火口から東方向へ概ね2.4kmまで飛散した。

噴火は235回（前年は145回）発生し、前年に比べ増加した。このうち爆発的噴火が85回と前年（84回）と同程度であった。

また、同火口では、夜間に高感度の監視カメラで火映をほぼ連続観測した。

昭和火口では、平成30年4月4日以降、ごく小規模な噴火も観測されておらず活動は極めて低調に経過した。噴煙は白色で概ね火口縁上100m以下で推移した。

火山性地震の年回数は1,439回で、前年（1,434回）と同程度であった。震源は、主に南岳直下の深さ0～3km付近、桜島南西の深さ6～11km付近及び桜島東の深さ6km付近に分布した。

火山性微動の継続時間の年合計は113時間39分で、前年（151時間0分）に比べ減少した。ほとんどが噴火に伴うものであった。

桜島島内の傾斜計及び伸縮計では、大きな変化は観測されなかった。7月18日からわずかな山体膨張が認められていたが、同月20日以降概ね停滞した。また、一部の噴火に伴い、噴火前のわずかな山体の膨張（隆起）及び噴火後のわずかな収縮（沈降）が観測された。9月19日頃から23日にかけては、それらの中で比較的変動量の大きい山体の膨張がみられたが、23日13時35分から16時00分まで継続した噴火に伴い概ね解消した。

GNSS連続観測では、桜島島内の一部の基線で令和3年11月頃から山体膨張に伴うとみられるわずかな伸びがみられていたが、2月下旬頃から停滞した。また、始良カルデラ（鹿児島湾奥部）を挟む基線では、令和3年10月頃から、始良カルデラの地下深部の膨張を示す基線の伸びがみられていたが、3月頃から停滞した。始良カルデラの地下深部には、マグマが長期にわたり蓄積した状態と考えられる。

降灰量は、鹿児島地方気象台で、年合計126g/m²（降灰日数62日）の降灰を観測し、月別では9月が最も多く、月合計53g/m²であった。

鹿児島県が実施している降灰の観測データから推定した令和4年の火山灰の総噴出量は、約36万トン（前年は約56万トン）で、噴火活動が活発となった7月以降、やや増加した。

火山ガス（二酸化硫黄）の1日あたりの放出量は、やや多い状態（1,000トン前後）で経過していたが、7月下旬には2,000トンを上回るなど増加し、そのあとは概ね多い状態（700～4,000トン）で経過した。

桜島島内及びその周辺における赤外熱映像装置による観測では、昭和火口近傍及び南岳

南東側山腹で、これまでと同様に地熱域を観測したが、特段の変化は認められなかった。10月11日に実施した観測では、デジタルカメラによる撮影で南岳山頂火口の火映を確認した。上空からの観測では、火口内及び火口周辺の状況に特段の変化は認められなかった。

(2) 各月の経過

【1月～6月】

南岳山頂火口では、噴火活動は概ね低調な状態で経過した。

噴火が1月は7回、2月は2回、3月と4月はごく小規模な噴火が時々発生、5月は3回、6月は3回で、このうち爆発的噴火が1月は5回、2月～5月は観測なし、6月は1回発生した。

1月28日13時19分の爆発的噴火では、弾道を描いて飛散する大きな噴石は最大で4合目（南岳山頂火口より1,300～1,700m）まで達し、噴煙は火口縁上3,400mまで上がった。2月は噴煙が最高で火口縁上1,300mまで上がり雲に入った。3月は噴煙が最高で火口縁上600mまで上がった。4月は噴煙が最高で火口縁上900mまで上がった。5月は噴煙が最高で火口縁上1,500mまで上がった。6月27日12時21分は爆発的噴火が発生し（1月28日以来）、弾道を描いて飛散する大きな噴石が最大で7合目（南岳山頂火口より600～900m）まで達した。また、噴火に伴う噴煙は最高で火口縁上1,600mまで上がった。

昭和火口では、1月～6月に噴火は観測されなかった。

火山性地震の月回数は、1月は103回、2月は22回、3月は36回、4月は37回、5月は154回、6月は57回で、震源は南岳直下の深さ0～3km付近、桜島南西側の深さ7～10km、桜島西側の深さ7km付近に分布した。

火山性微動の継続時間の月合計は、1月は5分、2月は5分、3月と4月は観測なし、5月は4時間33分、6月は10時間4分であった。

桜島島内の傾斜計及び伸縮計では、地殻変動は1月上旬から中旬にかけて一時的に停滞したが、1月22日頃から再び観測された。2月下旬から概ね停滞した。

GNSS連続観測では、桜島島内の一部の基線で山体膨張に伴うとみられるわずかな伸びが認められていたが、2月下旬頃から停滞した。また、始良カルデラ（鹿児島湾奥部）を挟む基線では、始良カルデラの地下深部の膨張を示す基線の伸びがみられていたが、3月頃から停滞した。始良カルデラの地下深部には、マグマが長期にわたり蓄積した状態と考えられる。

降灰量の月合計は、鹿児島地方気象台で、1月は0g/m²未満（降灰日数1日）、2月は0g/m²未満（降灰日数2日）、3月と4月は観測なし、5月は0.5g/m²未満（降灰日数3日）、6月は観測なし。

鹿児島県が実施している降灰の観測データから推定した火山灰の総噴出量は、1月は約2万トン、2月は約1万トン、3月は約8千トン、4月は約8千トン、5月は約6千トン、6月は約4千トンであった。

火山ガス（二酸化硫黄）の1日あたりの放出量は、1月400～1,000トン、2月700～1,300トン、3月800～1,300トン、4月500～1,300トン、5月500～1,700トン、6月800～1,200

トンとやや多い状態であった。

【7～12月】

南岳山頂火口では、7月中旬頃から噴火活動が活発となった。

噴火が7月は37回、8月は71回、9月は36回、10月は39回、11月は17回、12月は20回で、このうち爆発的噴火が7月は12回、8月は16回、9月は23回、10月は12回、11月は5回、12月は11回発生した。

7月24日に爆発的噴火が発生し、弾道を描いて飛散する大きな噴石が火口から東方向へ2.4kmを超えて飛散した。桜島で弾道を描いて飛散する大きな噴石が2kmを超えて飛散したのは、令和2年6月4日以来である。また、噴煙は火口縁上300mまで上がり雲に入った。7月は噴煙が最高で火口縁上2,800mまで上がった。8月2日00時55分の爆発的噴火では、噴煙が火口縁上2,800mまで上がった。8月15日00時09分の爆発的噴火では、弾道を描いて飛散する大きな噴石が4合目（南岳山頂火口から1,300～1,700m）まで達した。9月30日00時00分の爆発的噴火では、弾道を描いて飛散する大きな噴石が4合目（南岳山頂火口から1,300～1,700m）まで達した。9月30日11時44分の爆発的噴火では、噴煙が火口縁上2,800mまで上がった。9月23日13時35分の噴火では、噴煙が火口縁上1,700mまで上がり、同日16時00時まで継続した。10月10日19時32分の爆発的噴火では、弾道を描いて飛散する大きな噴石が4合目（南岳山頂火口より1,300～1,700m）まで達した。10月18日14時24分の爆発的噴火では、噴煙が火口縁上2,400mまで上がった。11月4日05時15分及び11月20日19時54分の爆発的噴火では、弾道を描いて飛散する大きな噴石が7合目（南岳山頂火口より600～900m）まで達した。また、11月21日13時34分の爆発的噴火では、噴煙が火口縁上2,200mまで上がった。12月3日19時29分の噴火では、弾道を描いて飛散する大きな噴石が5合目（南岳山頂火口より1,000～1,300m）まで達した。12月2日03時40分の爆発的噴火では、噴煙が火口縁上3,200mまで上がった。

昭和火口では、7月～12月に噴火は観測されなかった。

火山性地震の月回数は、7月は146回、8月は207回、9月は319回、10月は145回、11月は135回、12月は78回で、震源は南岳直下の深さ0～3km付近、桜島南西の深さ8～11km付近、桜島東の深さ6km付近に分布した。

火山性微動の継続時間の月合計は、7月は8時間48分、8月は65時間28分、9月は17時間39分、10月は53分、11月は32分、12月は5時間30分であった。

桜島島内の傾斜計及び伸縮計では、8月中旬から下旬には比較的大きい山体の膨張（隆起）がみられた。9月19日頃から23日にかけては比較的変動量の大きい山体の膨張（隆起）がみられ、9月23日13時35分から16時00分まで継続した噴火に伴い概ね解消した。

GNSS連続観測では、桜島島内の一部の基線での伸びは停滞していた。始良カルデラ（鹿児島湾奥部）を挟む基線では伸びは停滞していた。始良カルデラの地下深部には、マグマが長期にわたり蓄積した状態と考えられる。

降灰量の月合計は、鹿児島地方気象台で、7月は28g/m²（降灰日数6日）、8月は観測なし、9月は53g/m²（降灰日数14日）、10月は24g/m²（降灰日数18日）、11月は9g/m²（降

灰日数10日)、12月は12g/m²(降灰日数8日)であった。

鹿児島県が実施している降灰の観測データから推定した火山灰の総噴出量は、7月は約5万トン、8月は約8万トン、9月は約5万トン、10月は約4万トン、11月は約2万トン、12月は約6万トンであった。

火山ガス(二酸化硫黄)の1日あたりの放出量は、7月1,400~3,200トンと次第に増加し、8月1,500~2,500トン、9月1,900~2,400トン、10月1,900~4,000トン、11月700~1,700トン、12月1,400~2,800トンで概ね多い状態で経過した。

(3) 桜島の噴火警報の発表状況

令和4年7月24日20時50分に噴火警報を発表。噴火警戒レベルを3(入山規制)から5(避難)に引上げ。桜島の南岳山頂火口及び昭和火口から概ね3km以内の居住地域(鹿児島市有村町および古里町の一部)では、大きな噴石に厳重な警戒(避難等の対応)。

令和4年7月27日20時00分に火口周辺警報を発表。噴火警戒レベルを5(避難)から3(入山規制)に引下げ。桜島では、南岳山頂火口及び昭和火口から2kmを超える範囲に影響を及ぼす噴火が発生する可能性は低くなった。

火山名 桜島 噴火警報（居住地域）

令和4年7月24日20時50分 福岡管区気象台・鹿児島地方気象台

＊＊（見出し）＊＊

<桜島に噴火警報（噴火警戒レベル5、避難）を発表>

桜島の南岳山頂火口及び昭和火口から概ね3 km以内の居住地域（鹿児島市有村町及び古里町の一部）では、大きな噴石に厳重な警戒（避難等の対応）をしてください。

<噴火警戒レベルを3（入山規制）から5（避難）に引上げ>

＊＊（本文）＊＊

1. 火山活動の状況及び予報警報事項

桜島の南岳山頂火口で、本日（24日）20時05分に爆発が発生し、弾道を描いて飛散する大きな噴石が火口から約2.5 kmまで達しました。

桜島の火山活動は非常に活発化しています。南岳山頂火口及び昭和火口から概ね3 km以内の居住地域（鹿児島市有村町及び古里町の一部）では、大きな噴石に厳重な警戒（避難等の対応）をしてください。

2. 対象市町村等

以下の市町村では、当該居住地域で避難などの厳重な警戒をしてください。

鹿児島県：鹿児島市

3. 防災上の警戒事項等

南岳山頂火口及び昭和火口から概ね3 km以内の居住地域（鹿児島市有村町及び古里町の一部）では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に厳重な警戒（避難等の対応）をしてください。また、概ね2 kmの範囲では火砕流に警戒をしてください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るため注意してください。

爆発に伴う大きな空振によって窓ガラスが割れるなどのおそれがあるため注意してください。なお、今後の降灰状況次第では、降雨時に土石流が発生する可能性がありますので留意してください。

＊＊（参考：噴火警戒レベルの説明）＊＊

【レベル5（避難）】：危険な居住地域からの避難等が必要。

【レベル4（高齢者等避難）】：警戒が必要な居住地域での高齢者等の要配慮者の避難、住民の避難の準備等が必要。

【レベル3（入山規制）】：登山禁止や入山規制等危険な地域への立入規制等。状況に応じて高齢者等の要配慮者の避難の準備等。

【レベル2（火口周辺規制）】：火口周辺への立入規制等。

【レベル1（活火山であることに留意）】：状況に応じて火口内への立入規制等。

（注：避難や規制の対象地域は、地域の状況や火山活動状況により異なる）

火山名 桜島 噴火警報（火口周辺）

令和4年7月27日20時00分 福岡管区気象台・鹿児島地方気象台

＊ ＊（見出し） ＊ ＊

<桜島に火口周辺警報（噴火警戒レベル3、入山規制）を発表>

桜島では、南岳山頂火口及び昭和火口から2 kmを超える範囲に影響を及ぼす噴火が発生する可能性は低くなりました。

<噴火警戒レベルを5（避難）から3（入山規制）に引下げ>

＊ ＊（本文） ＊ ＊

1. 火山活動の状況及び予報警報事項

桜島の南岳山頂火口では、7月24日20時05分に爆発が発生し、大きな噴石が火口から2.4 kmを超えて飛散しました。その後は、噴火や爆発が時々発生していますが、火口から2 kmを超えて大きな噴石が飛散する噴火は発生していません。

桜島では、南岳山頂火口及び昭和火口から2 kmを超える範囲に影響を及ぼす噴火が発生する可能性は低くなったと考えられます。しかしながら、現在も噴火活動が継続していることから、南岳山頂火口及び昭和火口から概ね2 kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。

2. 対象市町村等

以下の市町村では、火口周辺で入山規制などの警戒をしてください。

鹿児島県：鹿児島市

3. 防災上の警戒事項等

南岳山頂火口及び昭和火口から概ね2 kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るため注意してください。

爆発に伴う大きな空振によって窓ガラスが割れるなどのおそれがあるため注意してください。なお、今後の降灰状況次第では、降雨時に土石流が発生する可能性がありますので留意してください。

＊ ＊（参考：噴火警戒レベルの説明） ＊ ＊

【レベル5（避難）】：危険な居住地域からの避難等が必要。

【レベル4（高齢者等避難）】：警戒が必要な居住地域での高齢者等の要配慮者の避難、住民の避難の準備等が必要。

【レベル3（入山規制）】：登山禁止や入山規制等危険な地域への立入規制等。状況に応じて高齢者等の要配慮者の避難の準備等。

【レベル2（火口周辺規制）】：火口周辺への立入規制等。

【レベル1（活火山であることに留意）】：状況に応じて火口内への立入規制等。

（注：避難や規制の対象地域は、地域の状況や火山活動状況により異なる）

霧島山の火山活動状況

1 新燃岳

(1) 令和4年の概況

新燃岳火口では、噴火は観測されていない。白色の噴煙が概ね火口縁上100m以下で経過した。また、火口西側斜面の割れ目からの噴気は令和3年5月23日以降認められなくなったが、令和4年1月31日以降再びみられており、噴気の高さは概ね300m以下で経過した。

繰り返し実施した韓国岳及び親湯温泉付近からの現地調査では、新燃岳の火口内及び西側斜面の割れ目付近において地熱域を観測した。2月28日の観測では、西側斜面の割れ目上方の地熱域がわずかに拡大しているのを確認したが、その後の観測では、拡大傾向は認められなかった。また、火口内を覆う溶岩の中心部及び縁辺部の一部で白色の噴煙が上がっているのを引き続き確認した。

2月24日及び10月12日の上空からの観測では、新燃岳火口内、火口を覆う溶岩の縁辺部の一部及び西側斜面の割れ目付近から白色の噴煙が上がっているのを確認した。

新燃岳火口直下を震源とする火山性地震は、1月頃から時々わずかな増加がみられていたが、3月27日に増加し、多い状態となった。その後は増減を繰り返しながら次第に減少し、7月下旬以降は少ない状態で経過した。

火山性地震の年回数は1,706回で、前年(1,854回)より減少した。震源は、主に新燃岳火口直下のごく浅いところから深さ3km付近に分布した。その他に、新燃岳火口の西側2km付近の深さ3km付近、南南東側2km付近の深さ0km付近及び大幡山付近の深さ3km付近に分布した。

また、3月28日及び5月13日に継続時間の短い火山性微動を観測した。

火山ガス(二酸化硫黄)の放出量は、令和2年12月以降減少し、令和3年2月以降は検出限界未満で推移した。

新燃岳近傍の傾斜計では、3月28日に発生した火山性微動に伴い、新燃岳方向がわずかに上がる傾斜変動を観測した。その他は、山体の隆起を示す顕著な変化は観測されていない。

GNSS連続観測では、霧島山を挟む基線において、令和3年12月頃から霧島山の深い場所でのマグマの蓄積を示すと考えられる伸びが認められた。この変動は令和4年7月頃から停滞していたが、11月頃から再びみられた。なお、新燃岳を挟む一部の基線においては、4月以降わずかな伸びが認められたが、6月以降は停滞した。

(2) 各月の経過

【1月～6月】

期間中、新燃岳では火山活動は低下した状態であった。

1月は新燃岳火口では、噴煙の高さは火口縁上50m以下で経過し、火口西側斜面の割れ目では、31日に高さ10m未満のごく弱い噴気を観測した。2月は新燃岳火口では、噴煙の

状況に特段の変化はいられなかった。火口西側斜面の割れ目では、噴気活動がみられていた。新燃岳の西側斜面割れ目付近では、2月に入り割れ目付近において地熱域のわずかな拡大が認められた。3月は新燃岳火口では、噴煙の高さは概ね火口縁上50m以下で経過した。火口西側斜面の割れ目では、噴気の高さは概ね100m程度で経過し、噴気活動がみられていた。4月は新燃岳火口では、噴煙の高さは概ね火口縁上80m以下で経過したが、28日には一時的に火口縁上500mまで上がった。火口西側斜面の割れ目では、噴気の高さは100m程度で経過し、噴気活動がみられていた。5月は新燃岳火口では、噴煙の高さは概ね火口縁上100m以下で経過したが、4日には一時的に火口縁上300mまで上がった。火口西側斜面の割れ目では、噴気の高さは概ね100m以下で経過し、噴気活動がみられていた。6月は新燃岳火口では、噴煙の高さは概ね火口縁上100m以下で経過した。火口西側斜面の割れ目付近では、噴気の高さは概ね100m以下で経過し、噴気活動がみられていた。

新燃岳火口直下を震源とする火山性地震の月回数は、1月は295回、2月は140回、3月は230回、4月は202回、5月は235回、6月は150回であった。震源は新燃岳火口直下のごく浅いところから3km付近、新燃岳西側の深さ3km付近に分布した。

また、3月31日から4月1日には、えびの岳周辺を震源とする火山性地震が86回発生し、4月7日には182回とさらに増加したが、4月8日以降は減少した。4月2日及び4月29日には、大浪池周辺で火山性地震がそれぞれ23回及び17回と一時的に増加した。4月28日から夷守岳付近を震源とする火山性地震がやや増加したが、5月17日からは減少した。5月14日には、甕岳付近で火山性地震が16回と一時的に増加した。

火山性微動は、3月28日16時24分に継続時間2分程度の火山性微動が発生した。5月13日20時35分に継続時間約30秒の火山性微動が発生した。1月、2月、4月、6月は観測されなかった。

火山ガス（二酸化硫黄）の1日あたり放出量は、1月から4月の調査では検出限界未満であった。

GNSS連続観測では、霧島山を挟む一部の基線において、霧島山の深い場所でのマグマの蓄積を示すと考えられるわずかな伸びが認められていた。新燃岳を挟む基線においては、4月頃からわずかな伸びが認められたが、6月以降は停滞した。また、3月28日に発生した火山性微動に伴い、新燃岳方向がわずかに上がる傾斜変動を観測した。

【7月～12月】

期間中、新燃岳では火山活動は低下した状態であった。

7月は新燃岳火口では、噴煙の高さは概ね火口縁上50m以下で経過し、火口西側斜面の割れ目では、噴気の高さは概ね100m以下で経過した。8月は新燃岳火口では、噴煙の高さは概ね火口縁上100m以下で開花し、火口西側斜面の割れ目では、噴気の高さは概ね200m以下で経過した。9月は新燃岳火口では、噴煙の高さは概ね火口縁上100m以下で経過した。20日から21日にかけて噴煙の高さが火口縁上600～700mと一時的に増大したが、火山性地震やそのほかの観測データには特段の変化は認められなかった。火口西側斜面の割れ目では、噴気の高さは100m以下で経過した。10月は新燃岳火口では、噴煙の高さは火口縁

上100m以下で経過した、火口西側斜面の割れ目では、噴気の高さは300m以下で経過した。11月は新燃岳火口では、噴煙の高さは火口縁上40m以下で経過し、火口西側斜面の割れ目では、噴気の高さは200m以下で経過した。12月は新燃岳火口では、噴煙の高さは火口縁上100m以下で経過し、火口西側斜面の割れ目では、噴気の高さは100m以下で経過した。

新燃岳火口直下を震源とする火山性地震の月回数は、7月は175回、8月は132回、9月は76回、10月は22回、11月は13回、12月は35回であった。震源は新燃岳火口直下のごく浅いところから2 km付近、新燃岳の南南東約2 kmの深さ0 km付近、新燃岳から北東側約2 kmの深さ3 km付近、新燃岳西側約2 kmの深さ3 km付近に分布した。

また、えびの高原周辺を含む霧島山周辺では、所々で地震活動がみられた。9月11日に大浪池付近の深さ3～4 km付近で14回と、火山性地震が一時的にやや増加した。11月14日には、えびの岳付近の深さ2～3 km付近を震源とする火山性地震が4回発生した。12月28日と29日には、えびの岳付近の深さ2～3 km付近を震源とする火山性地震が9回発生した。

火山性微動は7月から12月にかけて観測されなかった。

火山ガス(二酸化硫黄)の1日あたり放出量は、10月の調査では検出限界未満であった。

GNSS連続観測では、霧島山を挟む一部の基線において、霧島山の深い場所でのマグマの蓄積を示すと考えられるわずかな伸びが認められていたが、7月頃から停滞し、11月頃から再びみられた。新燃岳を挟む基線においては停滞していた。新燃岳周辺の傾斜計では、火山活動に伴う特段の変化は観測されなかった。

(3) 霧島山(新燃岳)の噴火警報の発表状況

令和4年3月27日17時20分に火口周辺警報を発表。噴火警戒レベルを1(活火山であることに留意)から2(火口周辺規制)に引上げ。新燃岳火口から概ね2 kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒。

令和4年8月19日11時00分に警報解除を発表。噴火警戒レベルを2(火口周辺規制)から1(活火山であることに留意)に引下げ。

2 御鉢

(1) 令和4年の概況

御鉢では、火山活動に特段の変化はなく、噴火の兆候は認められない。

監視カメラによる観測では、噴煙は認められなかった。5月18日及び11月16日に実施した現地調査では、これまでの観測と比較して、火口底付近、火口壁南側及び火口壁西側の地熱域の状況に特段の変化は認められなかった。風下側の火口縁でわずかな臭気を確認した。また、11月の観測では火口内で弱い噴気を確認した。

2月24日及び10月12日の上空からの観測では、火口内及び火口周辺の状況に特段の変化は認められなかった。

火山性地震は少ない状態で経過し、年回数は2回と、前年（12回）に比べ減少した。震源が求まった火山性地震はなかった。

火山性微動は、平成30年2月10日以降、観測されていない。

地殻変動観測では、火山活動によると考えられる特段の変化は認められなかった。

(2) 各月の経過

【1月～12月】

期間中、火山活動に特段の変化はなく、噴火の兆候はない。

1月から12月にかけて、監視カメラによる観測では、噴煙は認められなかった。

火山性地震の月回数は、1月と8月はそれぞれ1回、2月から7月、9月から12月は観測されなかった。

火山性微動は、1月から12月にかけて観測されなかった。

地殻変動観測では、火山活動によると考えられる特段の変化は認められなかった。

(3) 霧島山（御鉢）の噴火警報の発表状況

令和4年は発表なし。

3 えびの高原（硫黄山）

(1) 令和4年の概況

硫黄山では、噴火は観測されていない。

硫黄山の南側の噴気地帯では、11月中旬頃から噴気活動の高まりがみられるなど活発な状態で、噴気の高さは概ね300m以下で経過した。硫黄山の西側500m付近では、令和3年12月以降弱い噴気が時々みられていたが、10月中旬以降はやや活発な噴気が観測され、噴気の高さは概ね50m以下で経過した。

繰り返し実施した現地調査では、赤外熱映像装置による観測により、硫黄山周辺の噴気地帯で地熱域を確認した。6月9日の現地調査では、硫黄山の火口内、南西側斜面及び西斜面の一部において、地熱域の拡大が認められたが、その後は大きな変化は認められなかった。12月1日には、硫黄山火口南側の噴気孔で噴出物の堆積がみられたとの通報があり、翌日（12月2日）実施した現地調査では、硫黄山南側の噴気地帯に位置する地熱域において、噴気孔の拡大及び同噴気孔からの噴出物とみられる堆積物を確認した。その後の観測では、噴気や地熱域の状況に特段の変化は認められなかった。

硫黄山付近では、火山性地震は概ね少ない状態で経過したが、4月中旬から5月上旬、及び11月下旬から12月中旬にかけて、わずかな増加がみられた。火山性地震の年回数は1,305回（令和3年は777回）であった。震源は、主に硫黄山近傍の深さ0～2 km付近に分布した。

韓国岳や大浪池及びその周辺では、3月末から所々で地震活動がみられた。硫黄山付近を除くえびの高原周辺（韓国岳付近、韓国岳北東、大浪池付近）の地震の年回数は266回（令和3年は183回）で、概ね少ない状態で経過した。震源は主に、韓国岳周辺の深さ0～5 km付近、韓国岳北東側の深さ0～8 km、大浪池周辺の深さ1～5 km付近、白鳥山周辺の深さ1～3 km付近及び甕岳周辺の深さ1 km付近に分布した。

えびの岳付近（硫黄山から西南西約3～4 km）の深さ1～3 kmにおいて、3月31日から4月7日にかけて火山性地震が時々増加し、その後も時々地震活動がみられた。

火山性微動は、平成30年6月20日以降、観測されていない。

GNSS連続観測では、硫黄山近傍の基線において山体の膨張を示す変動が令和3年2月以降は停滞していたが、令和4年11月頃から硫黄山の山体浅部における膨張を示すと考えられるわずかな伸びがみられた。

全磁力観測では、硫黄山の南側の観測点では、4月から6月にかけて一時的に全磁力の減少傾向が加速した。北側の観測点では全磁力の増加傾向が11月に停滞し、その後減少に転じた。

(2) 各月の経過

【1月～9月】

期間中、硫黄山では噴火の兆候は認められなかったが、活発な噴気活動が続いた。

1月は、硫黄山の南側の噴気地帯では白色の噴気が最高で300mまで上がった。硫黄山の

西側500m付近の噴気地帯では、噴気が時々観測された。2月は、硫黄山の南側の噴気地帯では活発な噴気活動が続き、硫黄山の西側500m付近の噴気地帯では噴気が時々観測された。硫黄山やその周辺の地熱域の状況に特段の変化はみられなかった。3月は、硫黄山の南側の噴気地帯では活発な噴気活動が継続し、硫黄山の西側500m付近の噴気地帯では、噴気が時々観測された。硫黄山やその周辺の地熱域の状況に特段の変化はみられなかった。4月は、硫黄山の南側の噴気地帯では白色の噴気が最高で300m以上に上がった。硫黄山の西側500m付近の噴気地帯では、4月28日と30日に高さ10m未満の弱い噴気を観測するなど、噴気が時々観測された。5月は、硫黄山の南側の噴気地帯では噴気が最高で300mまで上がった。硫黄山の西側500m付近の噴気地帯では、高さ20m以下の噴気を時々観測した。6月は、硫黄山の南側の噴気地帯では噴気が最高で200mまで上がった。硫黄山の西側500m付近の噴気地帯では、高さ30m以下の噴気を時々観測した。7月は、硫黄山の南側の噴気地帯では噴気が最高で200mまで上がった。硫黄山の西側500m付近の噴気地帯では、7月10日に高さ10m未満のごくわずかな噴気を観測した。8月は硫黄山の南側の噴気地帯では噴気が最高で200mまで上がった。硫黄山の西側500m付近の噴気地帯では、8月に入ってから噴気は観測されなかった。9月は、硫黄山の南側の噴気地帯では噴気が最高で300mまで上がった。硫黄山の西側500m付近の噴気地帯では、噴気は観測されなかった。

火山性地震の月回数は、硫黄山付近では、1月は74回、2月は64回、3月は103回、4月は284回、5月は277回、6月は85回、7月は58回、8月は40回、9月は22回であった。

えびの高原周辺（韓国岳付近、韓国岳北東側周辺及び大浪池周辺）では、1月は7回、2月は15回、3月は12回、4月は58回、5月は40回、6月は23回、7月は10回、8月は11回、9月は39回と少ない状態で経過した。

えびの岳付近（硫黄山から西南西約3～4km）において、3月31日から4月1日にかけて火山性地震が86回と一時的に増加した。8月4日から5日にかけてもえびの岳付近で、火山性地震が一時的に増加した。大浪池周辺の火山性地震は4月2日には23回と一時的にやや増加し、4月2日と4月29日にも一時的にやや増加した。9月11日にも大浪池周辺の火山性地震が14回と一時的にやや増加した。甕岳付近の火山性地震は5月14日に16回と一時的にやや増加した。

震源は、主に硫黄山近傍の深さ0～1km付近、韓国岳付近の深さ0～4km付近、韓国岳北東側の深さ1～5km付近、甕岳付近の深さ1～2km付近、白鳥山付近の深さ1～3km付近、大浪池周辺の深さ2～4km付近、えびの岳付近（硫黄山から西南西約3～4km）の深さ1～2kmに分布した。

火山性微動は、1月から9月にかけて観測されなかった。

GNSS連続観測では、硫黄山近傍の基線の長さには特段の変化はみられなかった。

全磁力観測では、硫黄山の南側の一部の観測点では、4月から6月にかけて一時的に全磁力の減少傾向が加速した。北側の観測点では全磁力の増加傾向がみられた。

【10月～12月】

期間中、硫黄山では活発な噴気活動が続き、11月中旬頃から噴気活動に高まりがみられ

た。

10月は、硫黄山の南側の噴気地帯では噴気が最高で300mまで上がった。硫黄山の西側500m付近の噴気地帯では、10月19日から噴気活動が再開し、噴気が最高で60mまで上がるなどやや活発な噴気活動が続いた。11月は、硫黄山の南側の噴気地帯では噴気が最高で300m以上に上がった。11月19日頃から、同噴気地帯内に位置する地熱域付近に、堆積物及び陽だまりに対応すると考えられる熱域が認められた。硫黄山の西側500m付近の噴気地帯では、噴気が最高で50mまで上がった。12月は、硫黄山の南側の噴気地帯では噴気が最高で300m以上に上がり、地熱域付近に噴気孔から噴出したと考えられる堆積物及び噴気孔に対応すると考えられる地熱域が認められた。硫黄山の西側500m付近の噴気地帯では、噴気が最高で30mまで上がるなどやや活発な噴気活動が続いた。

火山性地震の月回数は、硫黄山付近では、10月は15回、11月は103回、12月は180回であった。

えびの高原周辺（韓国岳付近、韓国岳北東側周辺及び大浪池周辺）では、10月は13回、11月は17回、12月は21回と少ない状態で経過した。えびの岳付近（硫黄山から西南西約3～4km）では、火山性地震が11月は4回、12月は9回発生した。

震源は、硫黄山近傍の深さ1～2km付近、大浪池周辺の深さ1～5km付近、甕岳付近の深さ1km付近、白鳥山付近の深さ3km付近、えびの岳付近の深さ2～3km付近に分布した。

火山性微動は、10月から12月にかけて観測されなかった。

GNSS連続観測では、11月頃から硫黄山の山体浅部における膨張を示すと考えられるわずかな伸びがみられた。

全磁力観測では、硫黄山の南側の観測点で全磁力の減少がみられた。北側の観測点では全磁力の増加傾向がみられていたが、11月頃から停滞・反転した。

(3) 霧島山（えびの高原（硫黄山））の噴火警報の発表状況

令和4年は発表なし。

4 大幡池

(1) 令和4年の概況

火山活動に特段の変化はなく、噴火の兆候は認められない。

監視カメラによる観測では、噴煙は認められなかった。12月15日に大幡山山頂及び大幡池東側湖岸付近から実施した現地調査では、大幡池及び大幡山付近において噴気や地熱域は観測されなかった。大幡池では、東側の湖岸付近の水面において湖底から火山ガスの噴出（気泡の湧出）を確認し、これまでと同様に、火山ガス（硫化水素）の臭気をわずかに感じた。

2月24日及び10月12日の上空からの観測では、火口内及び火口周辺の状況に特段の変化は認められなかった。

火山性地震は、年回数が1回と少ない状態で経過した。震源は、大幡山付近の深さ2 km付近に分布した。

火山性微動は少ない状態で経過した。年回数は10回であった（令和3年は1回）。震源は大幡山付近の深さ2 km付近、大幡池付近の深さ1 km付近及び大幡池の北北東約2 kmの深さ1 km付近に分布した。

火山性微動は観測されなかった。

GNSS連続観測では、大幡池及び大幡山を挟む基線には、特段の変化は認められなかった。

(2) 各月の経過

【1月～12月】

期間中、火山活動に特段の変化はなく、噴火の兆候は認められない。

監視カメラによる観測では、1月～12月にかけて噴煙は認められなかった。

火山性地震の月回数は、3月は1回、6月は2回、7月は3回、10月は3回、12月は1回と少ない状態であった。1月、2月、4月、5月、8月、9月、11月は観測されなかった。

震源は、大幡池の深さ1 km付近、大幡池の北北東側約2 kmの深さ1 km付近に分布した。大幡山から西側約1 kmの深さ3 km付近に分布した。

火山性微動は、1月～12月にかけて観測されなかった。

GNSS連続観測では、大幡池及び大幡山を挟む基線には、特段の変化は認められなかった。

(3) 霧島山（大幡池）の噴火警報の発表状況

令和4年は発表なし。

火山名 霧島山（新燃岳） 噴火警報（火口周辺）

令和4年3月27日17時20分 福岡管区気象台・鹿児島地方気象台

＊＊（見出し）＊＊

<霧島山（新燃岳）に火口周辺警報（噴火警戒レベル2、火口周辺規制）を発表>

新燃岳火口から概ね2 kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。

<噴火警戒レベルを1（活火山であることに留意）から2（火口周辺規制）に引上げ>

＊＊（本文）＊＊

1. 火山活動の状況及び予報警報事項

新燃岳では、火口直下を震源とする火山性地震が増加しており、本日（27日）17時台に入り前24時間で20回発生しています。

G N S S連続観測では、霧島山を挟む一部の基線において、霧島山での深い場所でのマグマの蓄積を示すと考えられるわずかな伸びが認められます。

今後、小規模な噴火が発生するおそれがあり、弾道を描いて飛散する大きな噴石が新燃岳火口から概ね2 kmまで、火砕流が概ね1 kmまで達する可能性があります。そのため、新燃岳火口から概ね2 kmの範囲では警戒してください。

2. 対象市町村等

以下の市町村では、火口周辺で警戒をしてください。

宮崎県：小林市

鹿児島県：霧島市

3. 防災上の警戒事項等

弾道を描いて飛散する大きな噴石が新燃岳火口から概ね2 kmまで、火砕流が概ね1 kmまで達する可能性があります。そのため、新燃岳火口から概ね2 kmの範囲では警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

地元自治体等が行う立入規制等にも留意してください。

＊＊（参考：噴火警戒レベルの説明）＊＊

【レベル5（避難）】：危険な居住地域からの避難等が必要。

【レベル4（高齢者等避難）】：警戒が必要な居住地域での高齢者等の要配慮者の避難、住民の避難の準備等が必要。

【レベル3（入山規制）】：登山禁止や入山規制等危険な地域への立入規制等。状況に応じて高齢者等の要配慮者の避難の準備等。

【レベル2（火口周辺規制）】：火口周辺への立入規制等。

【レベル1（活火山であることに留意）】：状況に応じて火口内への立入規制等。

（注：避難や規制の対象地域は、地域の状況や火山活動状況により異なる）

火山名 霧島山（新燃岳） 噴火予報：警報解除

令和4年8月19日11時00分 福岡管区気象台・鹿児島地方気象台

＊ ＊（見出し） ＊ ＊

<霧島山（新燃岳）に噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）：警報解除を発表
>

新燃岳火口周辺に影響を及ぼす噴火の可能性は低くなりました。

<噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から1（活火山であることに留意）に引下げ>

＊ ＊（本文） ＊ ＊

1. 火山活動の状況及び予報警報事項

新燃岳では火山活動が低下しています。

G N S S連続観測では、霧島山を挟む基線において、霧島山の深い場所でのマグマの蓄積を示すと考えられる伸びが認められましたが、7月頃から停滞しています。

新燃岳火口直下を震源とする火山性地震は、増減を繰り返しながらも減少傾向がみられており、その他の観測データにも火山活動の活発化を示す変化はみられていません。

これらのことから、新燃岳火口周辺に影響を及ぼす噴火の可能性は低くなったと考えられます。

2. 対象市町村等

以下の市町村では、特段の警戒が必要なくなりました。

宮崎県：小林市

鹿児島県：霧島市

3. 防災上の警戒事項等

活火山であることから、新燃岳火口内、火口縁及び西側斜面の割れ目付近では、火山灰の噴出や火山ガス等に注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

＊ ＊（参考：噴火警戒レベルの説明） ＊ ＊

【レベル5（避難）】：危険な居住地域からの避難等が必要。

【レベル4（高齢者等避難）】：警戒が必要な居住地域での高齢者等の要配慮者の避難、住民の避難の準備等が必要。

【レベル3（入山規制）】：登山禁止や入山規制等危険な地域への立入規制等。状況に応じて高齢者等の要配慮者の避難の準備等。

【レベル2（火口周辺規制）】：火口周辺への立入規制等。

【レベル1（活火山であることに留意）】：状況に応じて火口内への立入規制等。

（注：避難や規制の対象地域は、地域の状況や火山活動状況により異なる）

薩摩硫黄島の火山活動状況

(1) 令和4年の概況

硫黄岳火口では、噴火は観測されなかった。

白色の噴煙が概ね火口縁上500m以下で経過したが、時折、火口縁上1,000mを越えるなど高くなった。概ね年間を通して夜間に高感度の監視カメラで火映を観測した。

12月21日23時22分には、硫黄岳火口付近が一時的に青白く発光する様子を確認し、色不明の噴煙が火口縁上200mまで上がり南東に流れていくのを観測した。翌日午前の聞き取り調査では、集落（硫黄岳の西南西約3km）に降灰は確認されなかった。

1月17日の上空からの観測では、硫黄岳火口から白色の噴煙が上がっているのを確認した。また、火口周辺及び山体斜面の一部から噴気が上がっているのを確認した。前回（令和3年1月19日）の観測と比較して噴煙の状況に特段の変化はなかった。硫黄岳周辺の海岸付近では、火山活動に伴うと考えられる海水の変色を引き続き確認した。

7月6日から10日にかけて実施した現地調査では、硫黄岳火口からの噴煙の状況や硫黄岳西側の噴気及び地熱域の分布に特段の変化は認められなかった。

火山性地震は少ない状態で経過し、年回数は1,900回で、前年（2,205回）に比べて減少した。このうち、高周波地震の年回数は554回で、前年（549回）と同程度であった。震源が求まった火山性地震は、硫黄岳火口付近の深さ0km及び南海域の深さ約2km付近に分布した。

継続時間の短い火山性微動が7月3日に1回発生した。火山性微動が観測されたのは、令和3年9月19日以来である。12月21日に硫黄岳火口付近が一時的に青白く発光する様子が確認された際には、振幅の小さな火山性地震を観測した。空振は観測されなかった。

火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、1日あたり300～1,600トンと、1日あたり1,000トン前後の状態で経過した。

GNSS連続観測では、平成27年頃から一部の基線で長期的な緩みの傾向がみられている。

(2) 各月の経過

【1月～6月】

期間中、噴火は観測されていない。

1月は硫黄岳火口で白色の噴煙が最高で火口縁上1,000mまで上がった。2月は硫黄岳火口で白色の噴煙が最高で火口縁上1,000mまで上がった。3月は硫黄岳火口で白色の噴煙が最高で火口縁上1,200mまで上がった。4月は硫黄岳火口で白色の噴煙が最高で火口縁上1,000mまで上がった。5月は硫黄岳火口で白色の噴煙が最高で火口縁上1,200mまで上がった。6月は硫黄岳火口で白色の噴煙が最高で火口縁上1,000mまで上がった。また、期間中、夜間に高感度のカメラで火映を観測した。

火山性地震の月回数は、1月は164回、2月は146回、3月は171回、4月は144回、5月は126回、6月は154回であった。このうち高周波地震の月回数は、1月は48回、2月は40回、3月は35回、4月は39回、5月は64回、6月は95回であった。

火山ガス（二酸化硫黄）の1日あたりの放出量は、1月600～1,100トン、2月500～1,600トン、3月500～1,200トン、4月600～1,000トン、5月300～500トン、6月400トンであった。

GNSS連続観測では、一部の基線で長期的な縮みの傾向がみられた。

【7月～12月】

期間中、噴火は観測されていない。

7月は硫黄岳火口で白色の噴煙が最高で火口縁上 1,300m 以上に上がった。8月は硫黄岳火口で白色の噴煙が最高で火口縁上 1,100m以上に上がった。9月は硫黄岳火口で白色の噴煙が最高で火口縁上 1,000m以上に上がった。10月は硫黄岳火口で白色の噴煙が最高で火口縁上 800mまで上がった。11月は硫黄岳火口で白色の噴煙が最高で火口縁上 600m以上に上がった。12月は硫黄岳火口で白色の噴煙が最高で火口縁上 700mまで上がった。また、期間中、夜間に高感度のカメラで火映を観測した。

火山性地震の月回数は、7月は153回、8月は109回、9月は170回、10月は249回、11月は198回、12月は116回であった。このうち高周波地震の月回数は、7月は75回、8月は45回、9月は25回、10月は31回、11月は31回、12月は26回であった。震源が求まった火山性地震は、硫黄岳火口付近の深さ約0kmに分布した。

継続時間の短い火山性微動が7月3日に発生した。火山性微動が観測されたのは、令和3年9月19日以来である。12月21日に硫黄岳火口付近が一時的に青白く発光する様子が確認された際には、振幅の小さな火山性地震を観測した。空振は観測されなかった。

火山ガス（二酸化硫黄）の1日あたりの放出量は、7月 600～1,100 トン、8月 600～1,500 トン、9月 900 トン、10月 700～1,200 トン、11月 800～1,200 トン、12月 600～1,500 トンと、1日あたり 1,000 トン前後の状態が継続した。

GNSS連続観測では、一部の基線で長期的な縮みの傾向がみられた。

(3) 薩摩硫黄島の噴火警報の発表状況

令和4年は発表なし。

口永良部島の火山活動状況

(1) 令和4年の概況

口永良部島では、令和2年8月30日以降、噴火は観測されていない。

新岳火口の噴煙活動には特段の変化はなく、白色の噴煙が火口縁上概ね300m以下の高さで経過した。

1月17日実施の上空からの観測では、新岳火口から白色の噴煙が200m程度上がっていることを確認した。古岳火口内では、弱い噴気を確認した。新岳及び古岳の噴煙の状況に特段の変化は認められなかった。

3月11日に古岳山頂付近から実施した現地調査では、赤外熱映像装置による観測で、新岳火口外壁南側において、地熱域が前々回（平成26年5月）や前回（平成29年6月）と比較して縮小し、温度が低下していることを確認した。古岳火口底縁辺部及び火口西側においても、地熱域が前回（平成29年6月）に引き続き確認されたが、地熱域の状況に特段の変化は認められなかった。

5月11日にも古岳山頂付近から現地調査を実施したが、地熱域の状況に特段の変化は認められなかった。山麓から実施した現地調査では、赤外熱映像装置による観測において、新岳火口及び新岳火口西側割れ目付近の地熱域に特段の変化は認められなかった。

新岳火口付近及び古岳付近の浅い所が震源と推定される火山性地震は、概ね少ない状態で経過したが、3月12日から16日にかけて主に新岳火口付近の浅い所が震源と推定される地震が一時的に増加した。また、7月30日から31日にかけて、主に古岳付近が震源と推定される地震が一時的に増加した。新岳西側山麓の地震は令和3年10月17日以来発生していない。震源が求まった火山性地震は、新岳火口付近の深さ0～2km付近及び古岳付近の深さ0～1km付近に分布した。

火山性微動は観測されなかった。

火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、1日あたり6～60トンと少ない状態で経過し、検出限界を下回る日も時々みられた。

GNSS連続観測では、令和3年2月頃から基線の緩みがみられたが、同年5月頃から停滞している。

(2) 各月の経過

【1月～6月】

期間中、噴火は観測されていない。

1月は新岳で白色の噴煙が最高で火口縁上400mまで上がった。2月は新岳で白色の噴煙が最高で火口縁上300mまで上がった。3月は新岳で白色の噴煙が最高で火口縁上300mまで上がり雲に入った。4月は新岳で白色の噴煙が最高で火口縁上800mまで上がった。5月は新岳で白色の噴煙が最高で火口縁上800mまで上がった。6月は新岳で白色の噴煙が最高で新岳の火口縁上600mまで上がった。

新岳火口付近及び古岳付近の浅い所が震源と推定される火山性地震の月回数は、1月は

52回、2月は50回、3月は215回、4月は24回、5月は13回、6月は73回であった。震源は新岳直下の深さ0～2km付近、新岳火口及び古岳付近の深さ0～1km付近に分布した。

火山性微動は1月から6月にかけて観測されなかった。

火山ガス（二酸化硫黄）の1日あたりの放出量は、1月20～50トン、2月20～30トン、3月20～40トン、4月10～60トン、5月20～40トン、6月6～50トンと、概ね50トン以下の少ない状態で経過した。

GNSS連続観測では、基線の縮みは停滞していた。

【7月～8月】

期間中、噴火は観測されていない。

7月は白色の噴煙が最高で新岳の火口縁上900mまで上がった。7月30日から31日にかけて火山性地震が増加したが、噴煙の状況に特段の変化は認められなかった。8月は白色の噴煙が最高で新岳の火口縁上500mまで上がった。

新岳火口付近及び古岳付近の浅い所が震源と推定される火山性地震の月回数は、7月は71回、8月は66回であった。震源は新岳火口付近及び古岳付近の深さ0km付近に分布した。

火山性微動は7月と8月は観測されなかった。

火山ガス（二酸化硫黄）の1日あたりの放出量は、7月10～30トン、8月10トンと少ない状態で、検出限界を下回る日も時々みられた。

GNSS連続観測では、基線の縮みは停滞していた。

【9月～12月】

期間中、噴火は観測されていない。

9月は新岳で白色の噴煙が最高で火口縁上500mまで上がった。10月は新岳で白色の噴煙が最高で火口縁上200mまで上がった。11月は新岳で白色の噴煙が最高で火口縁上500mまで上がった。12月は新岳で白色の噴煙が最高で火口縁上200mまで上がった。

新岳火口付近及び古岳付近の浅い所が震源と推定される火山性地震の月回数は、9月は63回、10月は71回、11月は90回、12月は119回であった。震源は新岳及び古岳付近の深さ0km付近に分布した。

火山性微動は9月から12月にかけて観測されなかった。

火山ガス（二酸化硫黄）の1日あたりの放出量は、9月10～30トン、10月9～40トン、11月10トン、12月20トンと少ない状態で、検出限界を下回る日も時々みられた。

GNSS連続観測では、基線の縮みは停滞していた。

(3) 口永良部島の噴火警報の発表状況

令和4年5月25日11時00分に警報解除を発表。噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から1（活火山であることに留意）に引下げ。新岳火口周辺に影響を及ぼす噴火の可能性は低くなった。

令和4年7月31日06時40分に火口周辺警報を発表。噴火警戒レベルを1（活火山で

あることに留意) から 2 (火口周辺規制) に引上げ。新岳火口から概ね 1 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒。また、新岳火口から西側の概ね 2 km の範囲では、火砕流に警戒。

令和 4 年 9 月 1 日 11 時 00 分に警報解除を発表。噴火警戒レベルを 2 (火口周辺規制) から 1 (活火山であることに留意) に引下げ。新岳火口周辺に影響を及ぼす噴火の可能性は低くなった。

火山名 口永良部島 噴火予報：警報解除

令和4年5月25日11時00分 福岡管区気象台・鹿児島地方気象台

＊＊（見出し）＊＊

<口永良部島に噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）：警報解除を発表>

新岳火口周辺に影響を及ぼす噴火の可能性は低くなりました。

<噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から1（活火山であることに留意）に引下げ>

＊＊（本文）＊＊

1. 火山活動の状況及び予報警報事項

口永良部島では、火山性地震は概ね少ない状態で経過しています。

火山活動は低下しており、新岳火口周辺に影響を及ぼす噴火が発生する可能性は低くなりました。

2. 対象市町村等

以下の市町村では、入山規制などの特段の警戒が必要なくなりました。

鹿児島県：屋久島町

3. 防災上の警戒事項等

活火山であることから、新岳火口内、西側割れ目付近では、高温の噴気や火山ガス等に注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

＊＊（参考：噴火警戒レベルの説明）＊＊

【レベル5（避難）】：危険な居住地域からの避難等が必要。

【レベル4（高齢者等避難）】：警戒が必要な居住地域での高齢者等の要配慮者の避難、住民の避難の準備等が必要。

【レベル3（入山規制）】：登山禁止や入山規制等危険な地域への立入規制等。状況に応じて高齢者等の要配慮者の避難の準備等。

【レベル2（火口周辺規制）】：火口周辺への立入規制等。

【レベル1（活火山であることに留意）】：状況に応じて火口内への立入規制等。

（注：避難や規制の対象地域は、地域の状況や火山活動状況により異なる）

火山名 口永良部島 噴火警報（火口周辺）

令和4年7月31日06時40分 福岡管区気象台・鹿児島地方気象台

＊＊（見出し）＊＊

<口永良部島に火口周辺警報（噴火警戒レベル2、火口周辺規制）を発表>

新岳火口から概ね1kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。また、新岳火口から西側の概ね2kmの範囲では、火砕流に警戒してください。

<噴火警戒レベルを1（活火山であることに留意）から2（火口周辺規制）に引上げ>

＊＊（本文）＊＊

1. 火山活動の状況及び予報警報事項

口永良部島では、山体を震源とする火山性地震が昨日（30日）12時過ぎから増加しており、火山活動が高まっています。

口永良部島では火口周辺に影響を及ぼす噴火が発生する可能性があります。新岳火口から概ね1kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。また、新岳火口から西側の概ね2kmの範囲では、火砕流に警戒してください。

2. 対象市町村等

以下の市町村では、火口周辺で入山規制などの警戒をしてください。

鹿児島県：屋久島町

3. 防災上の警戒事項等

新岳火口から概ね1kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。また、新岳火口から西側の概ね2kmの範囲では、火砕流に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

＊＊（参考：噴火警戒レベルの説明）＊＊

【レベル5（避難）】：危険な居住地域からの避難等が必要。

【レベル4（高齢者等避難）】：警戒が必要な居住地域での高齢者等の要配慮者の避難、住民の避難の準備等が必要。

【レベル3（入山規制）】：登山禁止や入山規制等危険な地域への立入規制等。状況に応じて高齢者等の要配慮者の避難の準備等。

【レベル2（火口周辺規制）】：火口周辺への立入規制等。

【レベル1（活火山であることに留意）】：状況に応じて火口内への立入規制等。

（注：避難や規制の対象地域は、地域の状況や火山活動状況により異なる）

火山名 口永良部島 噴火予報：警報解除

令和4年9月1日11時00分 福岡管区気象台・鹿児島地方気象台

＊ ＊（見出し） ＊ ＊

<口永良部島に噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）：警報解除を発表>

新岳火口周辺に影響を及ぼす噴火の可能性は低くなりました。

<噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から1（活火山であることに留意）に引下げ>

＊ ＊（本文） ＊ ＊

1. 火山活動の状況及び予報警報事項

口永良部島では、火山性地震は概ね少ない状態で経過し、その他の観測データにも特段の変化は認められません。

火山活動は低下しており、新岳火口周辺に影響を及ぼす噴火が発生する可能性は低くなりました。

2. 対象市町村等

以下の市町村では、入山規制などの特段の警戒が必要なくなりました。

鹿児島県：屋久島町

3. 防災上の警戒事項等

活火山であることから、新岳火口内、西側割れ目付近では、高温の噴気や火山ガス等に注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

＊ ＊（参考：噴火警戒レベルの説明） ＊ ＊

【レベル5（避難）】：危険な居住地域からの避難等が必要。

【レベル4（高齢者等避難）】：警戒が必要な居住地域での高齢者等の要配慮者の避難、住民の避難の準備等が必要。

【レベル3（入山規制）】：登山禁止や入山規制等危険な地域への立入規制等。状況に応じて高齢者等の要配慮者の避難の準備等。

【レベル2（火口周辺規制）】：火口周辺への立入規制等。

【レベル1（活火山であることに留意）】：状況に応じて火口内への立入規制等。

（注：避難や規制の対象地域は、地域の状況や火山活動状況により異なる）

諏訪之瀬島の火山活動状況

(1) 令和4年の概況

御岳火口では、令和3年12月中旬から令和4年4月上旬にかけて噴火活動が活発化した。その後、9月下旬から10月中旬にかけて噴火活動は一時的に活発化したものの、低調な状態で推移した。

爆発的噴火は年間で1,329回（令和3年は2,015回）発生した。噴火活動の活発化の際には、火口中心から1km前後まで飛散する大きな噴石を多数観測した。1月2日20時09分及び1月9日01時06分に発生した爆発的噴火では、弾道を描いて飛散する大きな噴石が火口中心から約1.1kmまで達した。

1月及び4月には噴煙の高さが火口縁上3,000mを超える噴火が複数回発生した。4月4日22時41分に発生した噴火では、噴煙が火口縁上3,300mまで上がった。

同火口では、概ね年間を通して夜間に高感度の監視カメラで火映を観測した。

上空からの観測（1月17日、9月29日、10月11日）では、いずれも御岳火口内から灰白色の噴煙が上がっていることを確認した。また9月29日の観測では、赤外熱映像装置で火口内及び火口周辺で地熱域を確認し、火口周辺では飛散した噴石と考えられる高温部が認められた。前回の観測（令和3年8月31日）と比べて御岳火口やその周辺に特段の変化は認められなかった。

6月23日から25日にかけて実施した現地調査では、御岳の山頂付近は雲のため確認できなかったが、山体南側斜面では新たな噴気や地熱域は認められなかった。

十島村役場によると、同火口による鳴動や降灰、爆発音が時々確認された。集落（御岳火口から南南西約3.5km）で降灰を確認した日数は57日（令和3年は47日）であった。

諏訪之瀬島の西側で発生していると推定される火山性地震が、5月中旬から11月上旬にかけて増加した。9月24日から25日にかけて、10月25日及び31日には一時的に多い状態となり、1日の発生回数は300回を超えた。島内で体を感じる振幅の大きな地震も時々発生し、9月10日、10月25日、10月31日及び11月8日には島内の震度観測点（鹿児島県十島村諏訪之瀬島）で震度3を観測した。これらの地震活動は島の西側のやや深部におけるマグマの蓄積量の増加に関連していると推定される。

御岳火口付近の爆発地震を除く火山性地震は、年間で9,290回（令和3年は14,802回）であった。島の西側で発生していると推定される火山性地震は年間で3,371回（令和3年は408回）であった。震源は御岳付近から諏訪之瀬島西側のごく浅いところから深さ5kmと、諏訪之瀬島西側の深さ6～9kmに分布した。

火山性微動は、主に噴火に伴って発生した。

地殻変動観測では、6月頃から島の西側やや深部におけるマグマの蓄積量の増加を示すと考えられる変動が観測されていたが、11月頃からは蓄積量の更なる増加と推定される変動は認められなかった。また、ナベタオ傾斜計（御岳火口から南西約2.2km）では、短期的な噴火活動の活発化時に西上がりの後、西下がりとなる傾斜変動が観測された。

火山ガス（二酸化硫黄）の1日あたりの放出量は、概ね数百トンから2,000トン程度で経

過し、2,000トンを上回る日も時々みられた。

(2) 各月の経過

【1月～4月】

御岳火口では、活発な噴火活動が継続した。

爆発的噴火の月回数は、1月は552回、2月は91回、3月は89回、4月は123回であった。

噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石が、1月2日と9日に火口中心から約1.1kmまで飛散した。2月は火口中心から最大で約400m、3月は最大で約800m、4月は最大で約900mまで飛散した。

1月26日12時53分の噴火では、噴煙が火口縁上3,000mまで上がった。2月1日14時48分及び28日03時51分の噴火では、噴煙が火口縁上2,200mまで上がった。3月31日13時56分の噴火では、噴煙が火口縁上2,700mまで上がった。4月4日22時41分の噴火では、噴煙が火口縁上3,300mまで上がった。

御岳火口付近の爆発地震を除く火山性地震の月回数は、1月は1,555回、2月は454回、3月は569回、4月は400回であった。諏訪之瀬島の西側で発生していると推定される火山性地震の月回数は、1月は75回、2月は52回、3月は64回、4月は91回であった。震源は諏訪之瀬島西側の深さ0～5km付近と御岳火口周辺の深さ1km付近に分布した。

火山性微動は、主に噴火に伴って発生した。1月22日と23日、2月10日、3月22日、4月2日には数Pa程度の空振を伴う火山性微動が発生した。

ナベタオ傾斜計（御岳火口より南西約2.2km）では、令和3年12月28日頃から西上がりの変動が観測されていたが、令和4年1月29日頃から西下がりの変動となった。2月2日頃からは停滞したが、2月14日頃からは西上がり、2月17日から19日にかけては西下がりとなり爆発的噴火が増加した。2月26日頃からは再び西上がりの変動となったが、3月17日から21日や、3月29日から4月8日にかけて西下がりの変動とともに爆発的噴火が増加した。その後は傾斜計の変動は停滞しており、火山活動に起因すると考えられる変化は認められない。

火山ガス（二酸化硫黄）の1日あたりの放出量は、1月4,100トン、2月3,400トン、3月3,400トン、4月300～1,600トンを観測した。

【5月～7月】

御岳火口では、活発な噴火活動が継続した。

爆発的噴火の月回数は、5月は33回、6月は21回、7月は34回であった。

噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石が、5月は火口中心から最大で約500m、6月は最大で約600m、7月は最大で約700mまで飛散した。

5月28日03時27分の噴火では、噴煙が火口縁上1,900mまで上がった。6月26日14時18分の噴火では、噴煙が火口縁上2,000mまで上がり、雲に入った。7月26日23時51分の噴火では、噴煙が火口縁上1,800m以上に上がった。

御岳火口付近の爆発地震を除く火山性地震の月回数は、5月は227回、6月は200回、7

月は404回であった。諏訪之瀬島の西側で発生していると推定される火山性地震の月回数は、5月は190回、6月は114回、7月は122回であった。震源は主に御岳火口から西側の深さ0～7km付近、御岳火口から北西側約5kmの深さ5km付近に分布した。

火山性微動は、主に噴火に伴って発生した。

ナベタオ傾斜計（御岳火口より南西約2.2km）では、5月21日頃からは西上がりの変動が観測されていたが、5月23日頃からは西下がりの変動となり爆発的噴火が増加した。5月末頃からやや大きな変動が見られたが、降水の影響を受けたと考えられる。

GNSS連続観測では、令和4年6月以降、十島（国）観測点でわずかな東方向への変動が認められた。

火山ガス（二酸化硫黄）の1日あたりの放出量は、5月1,200～2,000トン、6月1,000～3,700トン、7月700～2,500トンを観測した。

【8月～10月】

御岳火口では活発な噴火活動が続いている中で、爆発的噴火が増加した。

爆発的噴火の月回数は、8月は51回、9月は88回、10月は244回であった。

8月2日から7日にかけて爆発的噴火が増加した。8月7日09時59分の爆発的噴火では、噴煙が2,000mまで上がり、雲に入った。また8月11日04時16分の噴火と8月28日21時51分の爆発的噴火では、弾道を描いて飛散する大きな噴石が火口中心から約800mまで飛散した。9月24日18時19分の噴火では、噴煙が火口縁上2,000m以上に上がった。9月30日21時41分の爆発的噴火では、弾道を描いて飛散する大きな噴石が火口中心から南方向に約900mまで飛散した。10月8日13時42分の噴火では、噴煙が火口縁上2,400mまで上がった。また10月20日05時13分の爆発的噴火では、弾道を描いて飛散する大きな噴石が火口中心から南東方向に約800mまで飛散した。

御岳火口付近の爆発地震を除く火山性地震の月回数は、8月は391回、9月は514回、10月は764回であった。諏訪之瀬島の西側で発生していると推定される火山性地震の月回数は、8月は224回、9月は837回、10月は1,270回であった。また、諏訪之瀬島付近を震源とする振幅の大きな体を感じる地震が時々発生した。震源は御岳火口付近の深さ1km付近及び西側のごく浅いところから深さ7km、御岳付近から諏訪之瀬島西方のごく浅いところから深さ9kmに分布した。

火山性微動は、主に噴火に伴って発生した。

ナベタオ傾斜計（御岳火口より南西約2.2km）では、火山活動に起因すると考えられる西上がりの変動が継続して観測された。

GNSS連続観測では、十島（国）観測点でわずかな東方向への変動が認められたが、9月頃から停滞した。

火山ガス（二酸化硫黄）の1日あたりの放出量は、8月600～2,200トン、9月500～1,600トン、10月400～2,100トンを観測した。

【11月～12月】

御岳火口では噴火活動が継続した。

爆発的噴火の月回数は、11月は3回、12月は観測なし。

11月4日01時37分の噴火では、噴煙が火口縁上2,400mまで上がった。また11月15日02時51分の爆発的噴火では、弾道を描いて飛散する大きな噴石が火口中心から南方向に約500mまで飛散した。12月2日04時21分の噴火では、弾道を描いて飛散する大きな噴石が火口中心から東方向に約300mまで飛散した。12月3日07時30分の噴火では、噴煙が火口縁上1,800m以上に上がった。

御岳火口付近の爆発地震を除く火山性地震の月回数は、11月は189回、12月は140回であった。諏訪之瀬島の西側で発生していると推定される火山性地震の月回数は、11月は276回、12月は44回であった。11月8日に諏訪之瀬島付近を震源とする振幅の大きな体に感じる地震が発生した。震源は御岳付近から諏訪之瀬島西側のごく浅いところから深さ3kmに分布した。

火山性微動は、主に噴火に伴って発生した。

ナベタオ傾斜計（御岳火口より南西約2.2km）では、西上がりの変動は11月以降みられなかった。

GNSS連続観測では、島内の基線に特段の変化は認められなかった。

火山ガス（二酸化硫黄）の1日あたりの放出量は、11月700～2,000トン、12月400～800トンを観測した。

(3) 諏訪之瀬島の噴火警報の発表状況

令和4年7月11日11時00分に火口周辺警報を発表。噴火警戒レベルを3（入山規制）から2（火口周辺規制）に引下げ。御岳火口中心から1kmを超える範囲に影響を及ぼす噴火が発生する可能性は低くなった。

令和4年9月28日22時50分に火口周辺警報を発表。噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から3（入山規制）に引上げ。御岳火口中心から概ね2kmの範囲では、弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒。

火山名 諏訪之瀬島 噴火警報（火口周辺）

令和4年7月11日11時00分 福岡管区気象台・鹿児島地方気象台

＊ ＊（見出し） ＊ ＊

<諏訪之瀬島に火口周辺警報（噴火警戒レベル2、火口周辺規制）を発表>

諏訪之瀬島では、御岳（おたけ）火口中心から1 kmを超える範囲に影響を及ぼす噴火が発生する可能性は低くなりました。

<噴火警戒レベルを3（入山規制）から2（火口周辺規制）に引下げ>

＊ ＊（本文） ＊ ＊

1. 火山活動の状況及び予報警報事項

諏訪之瀬島の御岳（おたけ）火口では、4月上旬まで爆発の増減を繰り返すなど、噴火活動が活発化していましたが、その後は低下傾向です。その他の観測データにも火山活動の活発化を示す変化はみられていません。

これらのことから、御岳火口中心から1 kmを超える範囲に影響を及ぼす噴火が発生する可能性は低くなったと考えられます。しかしながら、現在も噴火活動が継続していることから、御岳火口中心から概ね1 kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒してください。

2. 対象市町村等

以下の市町村では、火口周辺で入山規制などの警戒をしてください。

鹿児島県：十島村

3. 防災上の警戒事項等

御岳火口中心から概ね1 kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

＊ ＊（参考：噴火警戒レベルの説明） ＊ ＊

【レベル5（避難）】：危険な居住地域からの避難等が必要。

【レベル4（高齢者等避難）】：警戒が必要な居住地域での高齢者等の要配慮者の避難、住民の避難の準備等が必要。

【レベル3（入山規制）】：登山禁止や入山規制等危険な地域への立入規制等。状況に応じて高齢者等の要配慮者の避難の準備等。

【レベル2（火口周辺規制）】：火口周辺への立入規制等。

【レベル1（活火山であることに留意）】：状況に応じて火口内への立入規制等。

（注：避難や規制の対象地域は、地域の状況や火山活動状況により異なる）

火山名 諏訪之瀬島 噴火警報（火口周辺）

令和4年9月28日22時50分 福岡管区気象台・鹿児島地方気象台

＊＊（見出し）＊＊

<諏訪之瀬島に火口周辺警報（噴火警戒レベル3、入山規制）を発表>

御岳（おたけ）火口中心から概ね2 kmの範囲では、弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒してください。

<噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から3（入山規制）に引上げ>

＊＊（本文）＊＊

1. 火山活動の状況及び予報警報事項

諏訪之瀬島の御岳火口では、26日から爆発が増加しており、噴火活動が活発化しています。24日から本日（28日）までの5日間に25回発生しました。

諏訪之瀬島では、噴火活動が活発となっており、御岳火口中心から概ね2 kmの範囲に大きな噴石が達する可能性があります。

2. 対象市町村等

以下の市町村では、火口周辺で入山規制などの警戒をしてください。

鹿児島県：十島村

3. 防災上の警戒事項等

御岳火口中心から概ね2 kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

＊＊（参考：噴火警戒レベルの説明）＊＊

【レベル5（避難）】：危険な居住地域からの避難等が必要。

【レベル4（高齢者等避難）】：警戒が必要な居住地域での高齢者等の要配慮者の避難、住民の避難の準備等が必要。

【レベル3（入山規制）】：登山禁止や入山規制等危険な地域への立入規制等。状況に応じて高齢者等の要配慮者の避難の準備等。

【レベル2（火口周辺規制）】：火口周辺への立入規制等。

【レベル1（活火山であることに留意）】：状況に応じて火口内への立入規制等。

（注：避難や規制の対象地域は、地域の状況や火山活動状況により異なる）